



事実は小説よりも奇なりと申します。最近であれば、中学生プロ棋士・藤井聡太四段の快進撃!はたまた、プロ野球界の二刀流・大谷翔平選手!漫画でさえ思いつかないような大活躍です。私たちの日常でも、小説やドラマでそんなストーリー展開にすれば、話がうま過ぎると思われるようなことってありますね。

87歳のTさんは、年の瀬も押し迫る師走の初旬、急な腹痛で救急搬送。そのまま入院。精査の結果、悪性リンパ腫という血液のがん。高齢でもあり、抗がん剤治療は行わない方針となりました。診断の時点で余命は半年以内。とにもかくにも本人は一刻も早く家に帰りたいと願い、家族がいる自宅を恋い焦がれました。2週間程の入院期間を経て、Tさんは念願の自宅退院を果たします。Tさんが思い焦がれた自宅を訪ねますと、ベッド上には満面の笑みのTさんが満足そうな表情で迎えてくれまして、「家はいいな〜〜」としみじみ。父親の喜ぶ姿に、同居の娘さんは思わず涙。

もちろん、徐々に色々な事ができなくなり、介護の手がかかるようになっていきます。薬が進歩した今、症状を和らげることは十分に可能ですが、日常生活の色々なことができなくなっていくことは残念ながら避けられません。思うに、人生の初めと終わりは、やはり人の助けが必要です。結局のところ人は一人では生きられず、それは必ずしも悪いことばかりでもありません。

Tさんの奥様もやはり高齢で難聴もあり、自分のことで精いっぱい状態です。勢い、娘さんの負担が増えざるをえません。娘さんは、間もなく定年退職でしたが、大変責任感の強い方で、何とかして最後の日まで勤め上げたい、とのお考え。父親の介護と自分の仕事の両立は、正直、大変だったと思います。しかし、お互いを思い遣り合う親子は、軽々と、とは申しませんが、互いに思い遣り合いながら、その難所を乗り越えて行かれます。

私が診療に伺った際にも、こんな場面がありました。「これか

ら何かしておきたいことはありますか?」と問う私に、Tさんはしばし考えてこう答えました。「何もありません。満足です。ただ、強いて言うならば、もう一軒、借家を造っておいてあげたかった。娘が困らないように・・・」死を目前に控えてなお、心配することは娘の老後、というTさんです。娘は笑いながらも目を潤ませて、父親のその言葉を聴いていました。娘に世話してもらうことが多くなっていった頃のある日、「先生に折り入ってお願いしたいことがあります」と神妙な顔のTさん。「娘に迷惑をかけて申し訳ない。もう終わりにしたい」と訴えて来られました。亡くなられる5日前に伺ったときには、さすがにかすれた声ではありましたが、晴れやかな表情で、「もう伝えるべきことはすべて伝え、やるべきことはやりました。あとは娘たちに自由にやらしてもらえばいいです。今は感謝しかありません」としっかり話してくれました。

娘さんの退職する日とTさんの命尽きる日のどちらが先になるか、という状況の中、どうなんでしょうか?仕事はもう行かない方がいいですか?ずっと傍にいた方がいいですか?と娘さんから尋ねられることもありました。なんとか娘さんの退職の日までがんばってもらいたいと祈るような気持ちでした。

そして、ようやく娘さんが退職する日を迎えます。最後の出勤の直前に訪問しました。仕事に行っていないものかどうか娘さんの心中に迷う気持ちを起こさせるようなTさんの状態です。「でも、出勤するつもりです。父は待っていてくれると思います」と決然とした表情で言われる娘さん。私も申し上げました。「そうですね。そうなさって下さい。お父さんもそれを望まれるでしょう。」

果たして、お父さんは待っていてくれました。娘が長年勤めてきた職場を退職した日の翌朝、妻と娘が見守る中、Tさんは静かに逝かれました。その日は、奇しくもTさん自身の88歳の誕生日でもありました。Tさんはあとに遺される家族の幸せを願いつつ、娘の退職を見届けて、次の世に誕生して行かれたのでした。